

忠義者のヨハネス

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫

むかし、あるところに、年よりの王さまがおりました。王さまは病びょうき気で、もう、この寝床ねどこが、どうやらじぶんの臨りんじゆう終とこの床とこになるらしい、と思つていました。

そこで王さまは、

「忠義者ちゆうぎもののヨハネスをよんでまいれ。」

と、おそばのものにいつけました。

忠義者のヨハネスというのは、王さまのいちばんお気にいりの家来けらいでした。この男は、一いっしやう生のあいだ、ずっと王さまに忠義をつくしてつかえてきましたので、こんなふうによばれていたのです。

ヨハネスがまくらもとへきますと、王さまはいいました。

「またとない忠義者のヨハネスよ、いよいよわしのさいごのときがちかづいたような気がする。ついては、これといって心配になることもないが、ただむすこのことだけが気がかりなのじゃ。あれは、まだ年もゆかないので、どうしてよいかわからぬこともあろう。ひとつ、おまえが親がわりになつて、なにかにつけて、あれの知らなければならぬことをおしえてやってはくれまいか。さもないと、わしは安心して目をつぶることができないのじや。」

これをきいて、忠義者のヨハネスはこたえました。

「かならず、王子さまを見すてるようなことはいたしませぬ。わ

たくしの命いのちにかけましても、きっと忠義をつくしておつかえもうします。」

すると、年よりの王さまはいいました。

「それをきいて、わしも安心して、やすらかに死しんでゆける。」
それから、さらにことばをつづけて、

「わしが死んだら、王子に城しろのなかをすっかり見せてやってくれ。へやも、広間ひろまも、穴あなぐらも、またそこにある宝たからものも、のこらず見せてやってもらいたい。だが、長い廊下ろうかのいちばんおくのへやだけは見せてやってはくれるな。あのなかには、金きんのお城おしろの王おうじ女よの絵えがしまつてあるのだ。もしも王子が、その絵え姿すがたをひと目でも見れば、たちまちその王女へのはげしい愛あいを心こころに感じて、

気をうしなつて、たおれてしまふだろう。そしてその王女のために、おそろしい災難さいなんにあうことになるう。だから、そういうことのないように、よく気をつけてやつてもらいたい。」

そこで、忠義者ちゆうぎもののヨハネスは、もういちど年とつた王さまの手をにぎつて、かならずそうすると約束やくそくしました。すると、王さまはそれきりものもいわず、頭をまくらにのせて、そのままなくなつてしまいました。

年よりの王さまがお墓はかにはこぼれてしまつてから、忠義者ちゆうぎもののヨハネスはわかい王さまにむかつて、じぶんがまえの王さまのおなくなりになるときにお約束やくそくしたことを話して、

「お約束は、かならずおまもりいたします。そして、お父上ちちうえさ

まにたいするのとおなじように、あなたさまにも、命いのちをなげだして、忠義ちゆうぎをあげみたいとぞんじます。」

と、もうしました。

やがて、喪もがあけたとき、忠義者のヨハネスはわかい王さまにいいました。

「さて、いよいよ、あなたさまのおうけつぎになった財産ざいさんをくらんになるときがまいりました。お父ちちうえ上さまのお城しろを案内あんないいたしましょう。」

それから、ヨハネスはお城じゆうの階段かいだんをのぼったりおりたりして、わかい王さまを案内してまわりました。そして、宝たからものも、りっぱなへやも、ひとつのこらず見せました。ただ、あの危き

険な絵姿けん えすがたのあるへやだけはあけませんでした。

ところでその絵は、扉とびらをあけますと、まっすぐまえに見えるよ
うな場所ばしょにおいてありました。その絵姿は、まことにみごとにで
きていて、それこそほんとうに生きているのではなからうかと、
しかも、これいじょうかわいらしい、美しいすがたは世界せかいじゅう
さがしてもあるまい、と思われるほどだったのです。

ところがわかい王さまは、この扉とびらのところだけは、忠義者ちゅうぎものの
ヨハネスがいつもすどおりしてしまいうのに気がつきました。そし
て、

「どうしてこの扉とびらはあけてくれないのかね？」
と、たずねました。

「そのなかには、あなたさまにとっておそろしいものがはいつて
いるからでございます。」

と、ヨハネスはこたえました。

けれども、王さまはいいました。

「わたしはお城しろのなかをのこらず見てしまった。だから、こんど
は、このなかにどんなものがあるか、知っておきたい。」

こういうと、わかい王さまはその扉とびらのところへいつて、むりや
りに扉をあけようと思いました。忠義者ちゆうぎもののヨハネスはそれをおし
とどめて、もうしました。

「わたくしは、このへやのなかにあるものを、けつしてあなたさ
まにお見せしないと、お父ちちうえ上さまにお約束やくそくしたのでございま

す。もしこの扉をおあけになりますと、あなたさまにも、わたくしにも、たいへんなわざわいがふりかかつてまいりましょう。」

「いや、いや。」

と、わかい王さまはこたえていいました。

「もしこのへやへはいることができなければ、おそらく、わたしはだめになつてしまふだろう。この目でそれを見ないうちは、夜も昼も心のおちつくことはあるまい。おまえがあけてくれるまで、わたしはこの場ばを一步ぼもうごかぬぞ。」

さすがの忠義者ちゆうぎもののヨハネスも、こうなつては、もうどうにもならないと思ひました。そこで、おもおもしろい心で、ふかいため息いきをつきつき、大きなかぎたばからその扉とびらのかぎをさがしだしま

した。そして扉をあけると、まずじぶんがさきにはいりました。ヨハネスとしては、じぶんがその絵のまえに立つて、王さまに見えないようにしようと思ったのです。でも、そんなことがなんになりましょう。王さまはつまさき立つて、ヨハネスの肩かたごしにその絵を見てしまったのです。しかも、金きんと宝ほう石せきにひかりかがや
く、世よにも美しいおとめの絵え姿すがたを見たとたんに、王さまは氣きを
うしなつて、ばったりとその場ばにたおれてしまったのです。忠ちゆう
義ぎ者もののヨハネスは、あわてて王さまをだきおこして、ベッドに
つれていきました。しかし、

（ああ、たいへんなことになってしまった。これから、いつたい
どうなるのだろう。）

と、思いますと、心配しんぱいで心配でたまりませんでした。

とにかく、ヨハネスは王さまにブドウ酒しゆをのませて、元氣をつけました。すると、王さまはようやくわれにかえりましたが、なによりもさきに、

「ああ、あの美しい絵姿えすがたのひとはだれだ。」
と、たずねました。

「あのかたは、金きんのお城しろの王女おうじよでございます。」
と、忠義者ちゆうぎもののヨハネスはこたえました。

すると、王さまはまたいいました。

「あのひとをしたうわたしの氣持ちは、かりに木ぎの葉がのこらず舌したであっても、どうていいいづくことができなほどなのだ。

わたしはいっしょう一生をかけても、あのひとをじぶんのものにした
 おまえはちゆうせつ忠節ならばもののないヨハネスだ。かならず、わた
 しをたすけてくれるだろうね。」

このちゆうぎ忠義なけらい家来は、いったいこれはどうしたらいいものだろ
 うと、長いこと考えこみました。なぜって、おうじよ王女のまえにでる
 ことだけでも、とつてもむずかしいことなのですから。ヨハネス
 は、やつとのことであるほうほう方法を思いついて、王さまにもうしま
 した。

「あの王女の身みのまわりにありますものは、テーブルでも、いす
 でも、おさらでも、さかすきでも、おわんでも、そのほかすべて
 の家具類かぐるいがぜんぶ、きん金でできております。ところで、あなたさま

の宝ものたからのなかには、五トンの金がございます。そのなかの一トンを、国じゅうの金細工師きんざいくしにおいて、いろいろなうつわや、道具どうぐや、またありとあらゆる種類しゅるいの鳥や、けものや、めずらしい動物のかたちにしらせるようになさいませ。そうすれば、きつと王女のお気にめしましょう。わたくしどもは、それをもつて、船ふねにのつてまいり、運うんだめしをすることにいたしましょう。

「
そこで、王さまは金細工師きんざいくしという金細工師を、ひとりのこらずよびあつめさせました。金細工師たちは夜も昼もはたらきつづけ、とうとう、世よにもみごとな品しなじなをつくりあげました。

その品物をすつかり船につみおえたところで、忠義者ちゆうぎもののヨハ



ネスは商^{しょう}人^{にん}の身なりをしました。王さまも、身分^{みぶん}を知られないようにするため、おなじ身なりをしました。それから、ふたりは海をわたって、長いながい旅^{たび}をつづけました。そうして、やつとのことで金^{きん}のお城^{しろ}の王女^{おうじよ}の住んでる都^{みやこ}につきました。

忠義者^{ちゆうぎもの}のヨハネスは、王さまに、

「船^{ふね}にのこつて待つ^まていてください。」

と、おねがいしました。そして、

「もしかすると、王女^{おうじよ}を船におつれするかもしれないです。ですから、なにもかもきれいにかたづけ、金^{きん}のうつわをならべさせ、船もりつぱにかざりつけるようにさせておいてくださいませ。」

と、いいました。

それからヨハネスは、まえかけのなかに金で細工さいくしたいろいろの品物しなものをつつんで、陸りくにあげました。そして、まつすぐ王女のお城しろへむかつていきました。ヨハネスがお城の庭にわにはいりますと、井戸いどのそばにひとりの美しいむすめが立っていました。むすめは手にふたつの金の手おけをもって、それで水をくんでいました。むすめはきらきらひかる水をはこんでいこうとして、なにげなくうしろをふりむきました。と、そこに知らない男が立っていましたので、

「どなたですか。」
と、たずねました。

すると、ヨハネスは、

「わたくしは商人しょうにんでございます。」

と、こたえながら、まえかけをひろげて、なかを見せました。

とたんに、むすめは思わず大きな声をあげて、

「まあ、なんてきれいな金細工品きんざいくひんでしょう。」

と、いいました。そして、手おけを下において、ひとつひとつの品しなを、穴あなのあくほど見つめました。それから、

「これはぜひ王女おうじよさまにおめにかけてみましょう。王女さまは金細

工品がとってもおすきですから、きつと、みんな買いあげてくだ

さいますよ。」

むすめはこういつて、ヨハネスの手をとり、お城しろのなかへ案あんな内いしていききました。このむすめは、王女のおつきの侍女じじよだった

のです。

おうじよ 王女は しなもの 品物を見ますと、それはそれはよろこんで、

「とてもきれいにできていますこと。みんな買いつつてあげましよう。」

と、もうしました。

けれども、ちゆうぎもの 忠義者のヨハネスはいいました。

「じつは、わたくしは、ある かねも 金持ちの しょうにん 商人の ばんとう 番頭にすぎないのでございます。わたくしがここにもつてまいりましたものなどは、しゅじん 主人が ふね 船においてありますものにくらべますと、まったくとるにたらないものばかりでございます。 ふね 船にありますものは、きんさいいくひん 金細工品といたしましては、もつともじょうずにできておりま

して、またと手にいれることのできない、りっぱなものばかりで
ございます。」

王女はその金細工品をみんなもつてくるようにとのぞみました
が、ヨハネスは、

「そういたしますには、ずいぶん日にちがかかります。それに、
たいへんな品しなかず数でございますから、ならべるだけでもたくさん
のおへやがいりまして、こちらさまのお城しろではとてもそれだけの
場所ばしょはございません。」

と、もうしました。

この話で、王女のめずらしいものを見たい、それを手にいれた
と思う気持ちは、ますますあおりたてられました。そしてとう

とう、王女はこういいました。

「では、あたしを船まで案内あんないしておくれ。じぶんでいって、おまえの主人の宝たからものを見せてもらうことにしましょう。」

そこで、忠義ちゆうぎ者のヨハネスは王女おうじよを船ふねに案内あんないして、たいへんよろこんでいました。王さまは王女を見ますと、あの絵にかかれていたすがたよりもはるかに美しいかたなので、いまにも胸むねがはりさけそうな思いでした。

さて、王女が船にのりこみますと、王さまがなかへ案内あんないしました。いっぽう、忠義者のヨハネスは舵かじ取りのところのこついで、船を陸りくからはなすようにいいつけました。

「帆ほという帆をみんなはって、空とぶ鳥のように走らせるのだ。」

船のなかでは、王さまが金の道具をひとつひとつ、王女に見せていました。おさらだの、さかずきだの、おわんだの、さては、鳥や、けものや、ふしぎな動物などを。王女がそれらをひとつのこらず見ているあいだに、何時間も何時間もたってしまいました。けれども、ながめるのにむちゆうになつていた王女は、船が走っているにはすこしも気がつかなくなつたのです。いよいよ、いちばんおしまいしなの品を見おわたつたとき、王女は商しょう人にんにお礼れいをいって、かえろうとしました。ところが、船ふなべりへでてみますと、なんということでしょう。船は陸地りくちを遠くはなれて、ひろいひろい海のまっただなかを、帆ほをいっぱいにふくらませて走っているではありませんか。

「ああ！」

と、王女はびつくりしてさげびました。

「あたしはだまされたのだ。あたしはさらわれて、商人の手におちてしまったのだ。これなら、いつそ死しんでしまったほうがいい。」

けれども、王さまは王女おうじよの手をとって、いいました。

「わたしは商人しょうにんではなく、じつは、王なのです。あなたにとらぬ生まれのものです。あなたを、はかりごとでつれだしたのも、あなたをおしたいするあまりにやったことなのです。あなたの絵姿えすがたをはじめて見ましたとき、わたしは気をうしなつてたおれたほどののです。」

金のお城の王女は、これをきいて、ようやく安心しました。

そして、王さまがすきになり、お妃さまになることをよろこんで承知しました。

さて、船の人たちが大海の上をすすんでいるときのことでした。忠義者のヨハネスが船のへさきにすわって、音楽をかなでていますと、三羽の鳥が空をとんでくるのが見えました。そこで、ヨハネスはひく手をやすめて、鳥たちの話に耳をかたむけました。だって、ヨハネスには鳥たちのことばがわかるのですからね。

一羽の鳥がさげびました。

「やあ、あいつ、金のお城の王女さまをつれてかえるぜ。」

「そうだな。」



と、二ばんめのがこたえました。

「だが、王女さまは、まだあいつのものじゃないさ。」

すると、三ばんめのがいいました。

「だって、あいつのものじゃないか。船ふねのなかに、ふたりでなら
んですわっているもの。」

すると、さいしよの鳥がまた口をだして、さげびたてました。

「そんなことは、なんにもなりやあしない。いいか、あいつらが
陸りくにつくとだ、キツネ色の馬が一ぴきとんでくる。すると、王さ
まはそれにとびのろうとする。ところが、のろうもんなら、馬の
やつは王さまをのつけたまま走りだして、空中にかけのぼるのさ。
で、王さまは二度とふたたびあのむすめにはあえないってわけよ

」。

「たすかる方法ほうほうはないのかい？」

と、二ばんめのがいいました。

「あるとも。だれかほかのものがすばやくその馬にとびのるんだ。そして、くらのわきについている鉄砲てつぱうをとって、そいつで馬をうち殺ころせば、わかい王さまはたすかるのさ。だけど、そんなことは、だれも知りやあしない。それに、知っていたって、それを王さまにいおうものなら、そいつはひざごぞうから足のつまさきまで石になっちまうんだ。」

そのとき、二ばんめの鳥がいいだしました。

「おれはもっと知ってるぞ。たとえばその馬が殺ころされたって、わか

い王さまは花よめをひきとめておくわけにやいかないんだ。あのふたりがそろつてお城しろにつくと、仕立したてあがった婚こん礼れい用ようのシヤツが鉢はちのなかにおいてある。そいつは、ちよつと見たところでは、金きんと銀ぎんとで織おつてあるみたいだが、ほんとうはイオウとチャン（コールタールなどを精せい製せいしたときの黒こつかつ色しよくのかす）とでできているんだ。もしも王さまがそれをきょうものなら、王さまのからだは骨ほねのずいまで焼やけただれちまうのさ。」

「で、たすかる方法ほうほうはないのかい？」

と、三ばんめの鳥がいました。

「そりやあ、あるさ。」

と、二ばんめのはこたえました。

「だれかが手ぶくろでそのシャツをつかむんだ。そして、火のなかにほうりこんで、もやしちまえば、わかい王さまはたすかるんだ。しかし、どうにもなりやあししないさ。それを知っていたって、王さまにいやあ、その男は心臓しんぞうからひざごぞうまで、からだの半分はんぶんが石になっちまうんだからな。」

そのとき、三ばんめの鳥がいいだしました。

「おれなんか、もっと知ってるぞ。たとえその婚礼用こんれいようのシャツが焼やかれたとしたって、まだまだあのわかい王さまは花よめをじぶんのものにしたとはいえないんだ。結婚式けっこんしきのあとでおどりはじまって、わかいお妃きさきがおどりだすと、きゆうにお妃はまっさおになって、死しんだようにぶったおれる。そのとき、だれかがお

妃をだきおこして、右の乳房ちぶさから血ちのしずくを三てきすいとつて、それをはきださなけりや、お妃は死んでしまふんだ。しかし、だれかがこのことを知っていて、つげ口でもすれば、その男は頭のとつぺんから足のつまさきまで、からだぜんたいが石になつちまうんだ。」

鳥たちはこんなことを話しあいながら、とびさつていきました。忠義者ちゆうぎもののヨハネスには、この話がすっかりわかりました。ですから、このときからというものは、ヨハネスは口もきかなくなつて、かなしそうにしていました。むりもありません。じぶんのきいたことを主人しゆじんにだまつていれば、主人がふしあわせになりますし、もしそれをうちあければ、じぶんの命いのちをうしなわなければ

ならないのですもの。でも、とうとうヨハネスは、

「ご主君しゅくんをおすくいしよう。たとえば、そのために、この命をうしなっても。」

と、ひとりごとをいいました。

いよいよ、一いちどう同のものが陸りくにあがりますと、鳥のいったおりのことがおこりました。キツネ色のりっぱな馬が一頭とう、まっしぐらにとんできました。

「ようし、あれに城しろまでのせていってもらおう。」

王さまはこういって、馬にとびのろうとしました。ところが、

そのときいちはやく、忠義者ちゆうぎもののヨハネスは、ひらりと馬にとびのるがはやいか、くらのわきから鉄砲てっぽうをとって、いきなりその

馬をうち殺ころしてしまいました。しかし、まえから忠義者のヨハネスのことをよく思つていなかつたほかの家来けらいたちが、口ぐちにさわぎたてました。

「王さまをお城しろまでおのせするはずの、あんなりつぱな馬を殺すとは、ふとどきしごくのやつだ。」

けれども、王さまはいいました。

「だまつて、あの男のやるとおりにさせておけ。忠義ちゆうぎこのうえもないヨハネスのことだ。それに、これがまた、なんの役やくにたつかもしれないぬ。」

やがて、みんながお城しろのなかにはいりますと、広間ひろまに鉢はちがおいであつて、そのなかに仕立したてあがつた婚こん礼れい用ようのシャツがはいつ

ていました。ちよつと見たところでは、どうしても金きんと銀ぎんとで織おつてあるとしか見えません。

わかい王さまは、つかつかとそのそばにあゆみよつて、それを手にとろうとしました。ところが、忠義者のヨハネスは王さまをおしのけて、手ぶくろでそれをひつつかみ、すばやく火のなかへほうりこんで、もやしてしまいました。

それを見て、ほかの家来けらいたちがまたぶつぶつもんくをいいはじめました。

「みろよ、あいつ、こんどは、王さまの婚こん礼れい用ようのシャツまでもやしているぞ。」

けれども、わかい王さまはいいました。

「これがまた、なんの役やくにたつかわからないのだ。あの男のする
とおりにさせておけ。忠義ちゆうぎこのうえもないヨハネスのことだ。」
まもなく、ご婚こんれい礼のおいおいがありました。おどりがはじま
つて、花よめもそのなかにはいりました。忠義ちゆうぎ者のヨハネスは
じつと気をつけて、花よめの顔ばかり見まもっていました。と、
とつぜん、花よめはまっさおになつて、死しんだように、床ゆかにうち
たおれました。とみるや、ヨハネスはいそいでかけよつて、花よ
めをだきおこし、ひとつのへやにはこびいれました。そして、花
よめをそこにねかしますと、じぶんはかたわらにひざまずいて、
花よめの右の乳房ちゆうぶさから三てきの血ちをすいとつて、はきだしました。
すると、たちまち、花よめは息いきをふきかえして、元気をとりもど

しました。

わかい王さまは、そばからこのありさまを見ていました。けれども、忠義者ちゆうぎもののヨハネスがどうしてこんなことをするのか、わけがわからないものですから、すっかり腹はらをたてて、

「あの男を牢ろうにいられてしまえ。」
と、どなりました。

そのあくる朝、忠義者ちゆうぎもののヨハネスは罪つみをいわたされて、首くびつり台だいにひきだされました。そして、高いところにあがって、いよいよおしおきをうけることになりました。そのとき、ヨハネスはいいました。

「死ぬしときまりましたものは、だれでも死ぬまえに、ひとことだ

けいいうことがゆるされております。わたくしにもそれをゆるして
いただけましようか？」

「よろしい、ゆるしてつかわす。」

と、王さまはこたえました。

そこで、ちゆうぎもの忠義者のヨハネスはいいました。

「わたくしは、身みにおぼえのない罪つみをいいわたされたのでござい
ます。わたくしは、いつなんどきも、忠義をつくしてまいりま
した。」

そしてヨハネスは、海の上で鳥たちの話をきいたこと、王さま
をすくうために、ああしたことをどうしてもしなければならなか
ったこと、などをものごとになりました。

それをきいて、王さまはさげびました。

「おお、忠節ちゆうせつならばものないヨハネスよ、ゆるすぞ。ゆる

すぞ。あのものを下へおろせ。」

ところが、忠義者ちゆうぎもののヨハネスは、さいごのことばをいいおわ

るといつしよに、息いきがたえて、ころがりおちました。ヨハネスは、

もう石になつていたのです。

王さまとお妃きさきさまは、たいそうこれをかなしみました。王さま

は、

「ああ、このようなりつばな忠節ちゆうせつにたいして、わたしはまた、

なんとというむくいかたをしたものだ。」

と、いいました。それから、その像ぞうをひきおこさせ、じぶんの寝し

室むろのベッドのそばに立てさせました。そして、それを見るたびに、王さまは涙なみだをながしていました。

「ああ、おまえをもういちど生かしてやりたいものだ。忠節ちゆうせつ

それから、時はたつて、やがてお妃さまきさきはふた子を生みました。ふた子は、どちらも王子おうじでした。すくすくと大きくなつて、いまでは、王さま、お妃さまのよろこびのたねとなりました。

ある日、お妃さまが教きょう会かいへでかけてしまつて、ふたりの子どもがおとうさまのそばであそんでいたときのことでした。王さまは、またいつものようになさしい思いで石の像ぞうをながめながら、ため息いきをついて、思わず大きな声でこういつてしまいました。

「ああ、おまえを生きかえらせることができたらなあ。
忠節ちゆうせつ

このうえもないヨハネスよ。」

と、どうでしょう、その石が口をききはじめて、

「はい、あなたさまのいちばんだいじなものを犠牲ぎせいにしてください
いますなら、わたくしはもういちど生きかえることができます。」
と、いうではありませんか。

これをきいて、王さまはさげびました。

「わたしがこの世よにもっているものなら、なんなりとおまえのた
めにささげるぞ。」

すると、石はなおもことばをつづけて、

「もしもあなたさまが、ごじぶんの手でふたりのお子さまの首くびを

はねて、その血をわたくしにぬってくださいますなら、わたくしは命をとりもどします。」

王さまは、じぶんのいちばんだいじな子どもをじぶんの手で殺さなければならぬときいたとき、思わずはつとしました。けれども、すぐに、ヨハネスのあのりっぱな忠義を思い、しかもそのヨハネスはじぶんのために死んだことを考えますと、つるぎをぬきはなつて、じぶんの手でふたりの子どもの首をはねました。そして、その血を石にぬりつけました。すると、たちまち、ヨハネスは命をとりもどして、あの忠義者のヨハネスが、むかしどおりの元気な、いきいきとしたすがたで、王さまのまえにあらわれしました。

ヨハネスは、王さまにいました。

「あなたさまのこのまごころは、むくいられぬはずはございませ
ん。」

こういうと、ヨハネスは子どもたちの首をとって、胴どうの上うにの
せ、傷きずぐち口に血をぬりつけました。と、みるみるうちに、子ども
たちは生きかえりました。そして、まるでなにごともなかつたよ
うに、元気にはねまわって、あそびつづけました。

王さまの心は、よろこびでいっぱいになりました。やがて、お
妃きよきさまがこちらへくるのを見ますと、王さまは忠義ちゆうぎ者のヨハネ
スとふたりの子どもを大きな戸だなのなかにかくしました。

お妃さまがへやのなかにはいつてきますと、王さまは、

「教きょう会かいでおいのりをしたのかね？」

と、たずねました。

「はい。」

と、お妃きさきさまはこたえました。

「でもあたしは、あの忠義者ちゆうぎもののヨハネスが、あたしたちのためにこんなふしあわせになったことばかり、ずっと考えておりましたの。」

それをきいて、王さまがいました。

「妃きさきよ、わたしたちは、ヨハネスをもういちど生きかえらせてやることができるのだよ。しかし、それにはふたりの子どもが必ひつ要ようなのだ。わたしたちは、あのふたりを犠牲ぎせいにしなればなら

ないのだ。」

お妃さまはまつさおになりました。心のなかでふかくおどろいたのです。けれども、

「あのりっぱな忠義ちゆうぎのことを思えば、それもいたしかたございません。」

と、もうしました。

これをきいて、王さまは、お妃さまきさきもじぶんとおなじ考えであることを知って、心からよろこびました。そこで戸だなのところへつかつかとあゆみよって、戸だなをひきあけました。そして、子どもたちとヨハネスをつれだしてきて、こういいました。

「ありがたいことだ。ヨハネスはすぐわれたぞ。子どもたちも、

もとのままだ。」

そこで、王さまは、お妃さまにいままでのことをのこらず話してきかせました。

こうして、この人たちは、この世よをさるまで、みんなでいっしょに、しあわせにくらしました。

青空文庫情報

底本：「グリム童話集（一）」偕成社文庫、偕成社

1980（昭和55）年6月1刷

2009（平成21）年6月49刷

※表題は底本では、「忠義者《ちゆうぎもの》のヨハネス」となっています。

入力：sogo

校正：チエロ

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

忠義者のヨハネス

グリム Grimm

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 矢崎源九郎訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>